

宝くじ狂想曲

吉田礼三 予科10-8
(米国 NJ) 航空13-2

私は27年前、アメリカに渡る前まで毎年、年末には宝くじを買って一獲千金の夢を見ていました。

そして、昨年末から、日頃お世話になった友人などにも一獲千金の夢が訪れる事を期待して一枚ずつお贈りしていますが、それに対し某君から「いつまで夢を追っているのか」と非難されましたので、61年前に私の身边に起こった宝くじ一等当選とその結果について、お伝えすることにしました。



米国ニュージャージーの自宅にて

終戦間もない昭和22年か23年の12月、当時、福岡郊外に所在していた福岡電波監視局の局長であった父の部下に、朝鮮から引き上げて勤務していた Y さんという独身の貧乏青年がいましたが、当時、日本勧業銀行が全国で販売を始めていた、一等が多分一千万円だったかの宝くじを、30円か50円で1枚購入したのです。なん

と、その彼が一等に当選したので賞金を受け取りに行く彼の護衛役として、たまたま冬休みで父のもとに帰省していた私が付き添って行くことになりました。Y さんは心身共に小心者で、信頼できる同僚が居なかったからです。私は彼と共に大きなリュックサックをかついで、日本勧業銀行福岡支店に札束を受け取りに行きました。

私を迎えた勧業銀行福岡支店では、支店長とスタッフが東京本社の頭取でも迎えるように丁寧に迎え、少なくとも半額は銀行預金に預けてくれるように勧めました。

しかし、銀行預金など持ったことのない Y さんは固辞して、それでも200万円ほどだけは預金して、残りの現金を、たしか、千円札と百円札にして、私と彼のリュックサックに詰め込んで、福岡市郊外の屏に囲まれた官舎の一隅にあった独身寮の Y さんの部屋に持って帰りました。その途中、福岡市内の満員のバスの中では、大金の入ったリュックに気付かれないようにビクビクしていました。

独身寮では、Y さんは、2つのリュックサックを金属の鎖で自分の体に巻き付けて夜を過ごしていましたが、父の説得の結果、10万円（当時の彼の月給は5千円ほどでした）を残して銀行に預けることになり、再び私は彼と一緒に、札束の入ったリュックサックを担いで勧業銀行福岡支店に運びました。そして、私は謝礼として食用のウサギを一匹貰いました。当時、Y さんは牛肉など食べて居なかったからでしょう。

（後日談）

Y さんは朝鮮から一緒に引き揚げた同郷人のある家族に大金の入った事を話した結果、同家の中年の主人からの提案で、同家が太田市で魚屋を開業するための土地購入代金と開業資金を融資する事に対し、かねて Y さんが思いを寄せていた可愛い娘さんを多額の結納金を払って迎えることにな

りました。

そして同家の主人は早速、魚屋を開業しましたが、可愛いお嫁さんは僅か二晩だけで昼間 Y さんが勤務中に大分の父親のもとに逃げ帰りました。

彼は優しい性格でしたが、身長が低いこともあり、およそ女性に好まれるタイプではなかったからでしょう。

彼は暫く希望を失ったような生活でした

が、私の父母の激励もあり、熊本に転勤後に、やさしい貞淑なお嫁さんを迎えることが出来、秀才の息子さんは一流大学を卒業後、父親の希望により、電電公社に入社されました。Y さんは定年までまじめに公務員としての生活を過ごし、数年前に逝去されました。